

2019 年度 福祉助成金（活動助成）成果報告書 提出用

公益財団法人 橋本財団  
理事長 橋本 俊明 様

2020 年 5 月 29 日

ふりがな	だいにのかんじゃかい すろーす			
団体名	第2の患者会 すろーす			
代表者名	役職名	代表理事	氏名	菱沼路代
連絡先	住所	非公開		
	TEL	非公開		
	E-mail	sloth.okayama@gmail.com		
	URL	<a href="https://www.facebook.com/sloth.okayama">https://www.facebook.com/sloth.okayama</a>		
設立年（西暦）	2018 年			
主な活動	1) 家族のためのがんカフェ 2) 遺族のためのがんカフェ 3) がんセミナー			
活動の対象者	がん患者の家族、遺族			
助成活動名	対話を通じたがん患者の家族・遺族への精神的支援			
助成額	319,710 円			
実施内容	目的	<p>がん患者を支える家族は、患者同様に精神的な揺れや肉体的な負担から、不安や抑うつなどの心理的ストレスが認められるケースが多いことから、「第2の患者」とも呼ばれ、患者同様にケアが必要であることが研究で明らかになっている。にもかかわらず、当事者に自分もケアの対象であるとの自覚が薄く、ケアが行き届いているとは言い難い。</p> <p>また、遺族についても「あの時の選択はあれでよかったのだろうか」といったがん患者の遺族特有の戸惑いがある。</p> <p>そこでこの活動は、闘病中のがん患者を支える家族、および家族をがんで亡くした遺族の精神的ケアを目的に、同じ立場の者どうして悩みや戸惑い、それに対する工夫などを安心して共有・交換できる場をとおして、自身の暮らしや人生に向き合う機会を提供する。</p>		
	内容	<p>1) 家族のためのがんカフェ 実施日：6月5日、9月5日、11月17日……計3回 会 場：ゆうあいセンター 参加者数：闘病中のがん患者の家族……計12名 闘病中のがん患者の家族が集い、治療方針や病状の伝え方について家族間で意見の食い違いがあったらどうするか、患者の生きがいをどうサポートするか、がんを抱えた家族にどれくらい気を遣うか、再発への不安などについて話し合った。</p> <p>2) 遺族のためのがんカフェ 実施日：5月15日、10月9日、11月17日、2月4日……計4回 会 場：ゆうあいセンター 参加者：家族をがんで亡くした遺族……計14名 家族をがんで亡くした遺族が集い、家族患者が亡くなった後も自分で自分を責め続けてしまうのはなぜか、時の流れによって気持ちはどう変化するか、家族の死から学んだこと、悲しみを強制されることへの違和感などについて話し合った。</p>		

		<p>3) 哲学カフェ「がんが教えてくれたこと」  実施日：4月6日  会場：ゆうあいセンター  参加者：がん患者の家族、遺族、がん体験者、医療者など……計14名  「がんが教えてくれたこと」をテーマに話し合い、「生をどう充実させるかを考えて生きるようになった」、「経験した人にしかわからない苦しみとは」、「家族が当たり前にいることのありがたさ」、「病院で過ごした家族水入らずの時間」などの話から、がんという病が私たちの人生や家族に与える意味や影響について考察した。</p> <p>4) がんセミナー「当事者と医療者がともに考える家族ケア」  実施日：7月21日  会場：ゆうあいセンター  参加者：がん患者の家族、遺族、がん体験者、医療者など……計14名  医師の黒田新士先生（岡山大学病院）をお招きし、がん医療と家族ケアの現状についてお話いただいた後、参加者も交えて、家族ケアの理想と現実、なぜ医療現場での家族ケアが難しいのか、医療者と家族のコミュニケーションのあり方などについて話し合った。</p> <p>5) 医療者のためのがんカフェ  実施日：1月12日  会場：岡山大学医歯薬学総合研究科  参加者：医療者および医学生……計14名  がん医療に携わる医師、看護師、薬剤師、医学生らが集って「家族の気持ちってどれくらい大事？」をテーマに話し合い、告知の際に本人と家族とで医療者の対応や気持ちが異なるかどうか、医療者自身が患者や家族の立場に立たされたときどう感じたか、家族とは何かについて考察した。</p>
	<p>成果</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● これまで不定期開催だったイベントをほぼ毎月開催できることができた。（ただし3月に予定していたがんセミナーは、新型コロナ・ウィルスの感染拡大状況を考慮し、未開催）</li> <li>● 専門家を招いての「がんセミナー」を実施することによって、家族や必要な知識や状況を提供すると同時に、医療現場における家族ケアの現状や困難、今後の連携の必要性を把握することができた。</li> <li>● 活動を支援してくれる医療者とのつながりが広がり、「医療者のためのがんカフェ」を開くことができた。（1/12、岡山大学医歯薬学総合研究科）</li> <li>● 活動について知った研究者より公開シンポジウム「がん医療における哲学対話のこころみ」（科研費：医療における「哲学的対話実践」モデルの構築）に登壇者としてお招きいただき、副代表・松川が活動について報告した。（2/15、京都大学杉浦地域医療研究センター）</li> <li>● 岡山県がん患者支援情報提供サイト「岡山がんサポート情報」、岡山市がん相談窓口カードに情報が掲載された。</li> </ul>
<p>今後の課題と対応策</p>		<ul style="list-style-type: none"> <li>● 活動の周知とネットワークの構築：今年度は医療者の理解や協力を得て予定になかった「医療者のためのがんカフェ」を実施することはできたが、岡山市以外での出張活動は会場確保や集客に不安が残る周知状況のため、残念ながら実現できなかった。広く活動について広く周知するには、HPの作成などが必要である。</li> <li>● 活動の手法と意義に関する研究：全国で様々な患者会、患者家族会が開かれているが、家族を対象をしばった対話の場は他に見られない。他地域では同じ哲学対話の手法を用いたがんカフェも開かれているが、対象のちがいによって適切な実施方法や活動意義は異なることがシンポジウム等で明らかになり、この活動の具体的な実施方法や参加者へのアンケート・インタビュー実施による活動の意義や当事者視点からの家族ケアのあり方の明確化が望まれている。</li> </ul>
<p>参加者・利用者の感想など</p>		<p>「ほんとに、このような場所がほしかったので、私にとっては心の拠りどころとなっています。患者同伴ではないので、ふだんの葛藤している気持ちを吐き出せたり、他の方の様子を伺うことができたりして、気持ちを新たにリセットできて、ホッとできます。」（家族のためのがんカフェ）</p> <p>「がん患者の家族として感じた自分自身の話を、安心した環境で聞いてもらうことができました。また、人の話に耳を傾けることができたのも貴重な体験だったと思います。現在</p>

子育て中で、自由に動ける時間に制限がありますが、機会があればまた参加したいと思っています。」(家族のためのがんカフェ)

「昨年母を亡くしましたが、年齢が30代と若いこともあり、同年代で親を亡くした経験のある方はほとんどいません。母がいない日々を幸せだと感じることに對してどこか罪悪感がありましたが、他の参加者の経験を聞き、忘れることは悪いことではないと気づかされました。」(遺族のためのがんカフェ)

『支える側の立場』の仕事をしているため、自分の弱さや愚痴を誰かに話すのが苦手になっていましたが、一人の家族として純粋に父のことを思い出し、話、涙できる場に感謝しております。またカフェに参加してない方でも、こうした場があるだけでも、『一人じゃないんだ』と思い、生きる支えになっているはずです。がんは特別な病気ではない時代だからこそ、皆さんにもっとこうした場があることを知っていただきたいと思います。」(遺族のためのがんカフェ)



写真の提出

